軽井沢未来構想会議 中村良夫委員長からのメッセージ

東京という消耗的な巨大文明圏は、明治以来、日本の繁栄を指導しながら、いつの間にか、富も人もブラックホールのように吸い取って地方を貧血させ、ひいては国全体を衰亡の淵へと引きずっているのではないか。この深い反省にたった国民的な危機意識の出口を、信州の小さな町・軽井沢に託そうとする熱い志のなかから、この報告書は成りました。

沸騰するような日本の近現代史のなかで、静かに文化の香りを放つ高原保養都市として、先駆的な役割を担ってきた軽井沢は、文明のあがきの果てに萎えた精神を癒すサナトリウム、あるいは生きる力を授ける学校のような場所であったかもしれません。

しかし、その名声を背にした軽井沢の繁栄は、今後 100 年の荒波に果して堪えられるでしょうか。新幹線や高速道路の開通がもたらした大衆観光の大波は、その名誉を危うくしないでしょうか。

そのような問題意識から発し、22 世紀を見据えた軽井沢町のグランドデザインと解説冊子は、次のような性格を持つことになりました。

答えではなく問題提起です

100 メートル先の視界を照らす強いヘッドライトも 1,000 メートル先には届きません。100 年先へ投げた私たちの極超短波レーダーがとらえた映像は、やや異彩を帯びることになりました。たとえば、行政慣行や現行法令に捕われぬ画像表現を用いたり、あるいは、やや詩的な言葉にその志を託したからです。

このようにして示されたグランドデザインは警鐘のような問題提起あるいは展望視点であって、答えではありません。

着地点の明瞭な姿ではなく、進むべき方向をぼんやり暗示するに過ぎないその光の渦は、軽井沢に住む皆様とこの風土を愛する別荘住民の協力によって次第に明瞭な姿を現すでしょう。

生活スタイルの創成が経済活力を生みます

20 世紀の後半に訪れた高度成長のなかで、国や大企業がつくりあげた規格化と大量生産システム。その効率的ではあるが渇いた土壌から金太郎飴のように、全国どこでも判でおしたようなまち並みや大量消費生活が蔓延し、文化の多様性や生命の豊饒（ほうじょう）は見失われました。生産・行政の中枢から、遠く離れた生活の現場を操った結果、人のつながり

や生活感が薄くなり、子供たちは現実と虚構のあいだで放心しているように見えます。

軽井沢町のグランドデザインは、誘致企業による生産もさることながら、それよりも生活スタイルを提案し、そこからその艶のある波動が少しずつ内発的に地場産業の発生へと遡及することを期待しました。また、喫緊の行政課題には必ずしも言及していませんが、たとえば、農業については個性的な食文化による地産地消を重んじ、福祉といえば、法定介護にもまして健康寿命[※17]を伸ばす生活を考え、あるいは自治や人の絆、暮らしのなかのスポーツ、芸術や文化から社会の活力を湧き立たせる生活様式の提案に重点を置くことになりました。

このようにして、生きる意味を奪還する本物の生活スタイルと風土へ寄り添う人生を支えるために、地場の経済は勢いづくでしょう。

風土の泉が湧く 22 世紀風土フォーラム

生産よりも生活から考える問題提起型の形式をとったこの報告は、その答えを実践的に模索する舞台として、22 世紀風土フォーラムを提案することになりました。高等遊民が集う大正時代の旧三笠ホテルは、21 世紀フォーラムでした。そして今、この 22 世紀風土フォーラムで繰り広げられる、行政、町民、別荘住民の交歓によるまちづくりは、22 世紀に向う未来のライフスタイルを語り、産みだす真剣な愉楽の広場です。そこには、近代化という劇薬を薄める免疫力を秘めた、野太い風土自治の泉が湧いています。知が集積し交通に恵まれたくつかけテラス周辺は、フォーラムの湧水点になるでしょう。すなわちそこがコンパクトシティの心臓です。

すでに走り出しています

たしかに軽井沢町のグランドデザインは、問題提起あるいは未来をのぞむ視点に過ぎませんが、ここに描かれた画像は決して荒唐無稽ではありません。よく注意してご覧になると、そこには軽井沢の愛すべき山河はもちろん、過去 100 年の文化遺産、つまり風土の至宝へ目配りされています。そればかりか、大賀ホール、軽井沢発地市庭（ほっちいちば）、風越スポーツパーク、追分のまち並み、木もれ陽の里、くつかけテラス、スマートコミュニティ構想、国際会議場構想など、過去の達成や近未来ヴィジョンがすべて組み込まれているこのグランドデザインは、

きわめて現実的でもあります。100 年と言いながら皆さんは、いつのまにか２歩も３歩も踏み出しているわけです。

今までの日本のように、東京から天下り的に降ってくる補助金つきの、規格化された、こまぎれ将来像の時代はやがて過ぎ去るでしょう。むしろ行政と対話しながら、町民が自ら、その風土にかなった生活感覚と自治的な結束のなかから、オーダーメイドの答えを絞り出さねばなりません。したがって、この産みの苦しみと歓びを傍観する批判のための批判は、あらかじめ拒んでおきたいと思います。

委員会のなかで専門委員から指摘されながら、この「解説冊子」に盛りきれなかった多くの貴重な意見や資料、発言記録、それらの委員長総括、そしてまた図面などは、そのまま「軽井沢町グランドデザイン作成業務委託報告書」として別にまとめてすべて公開されます。皆様の討議のなかで、時機にふれ参考にしていただければ幸いです。

行政と町民並びに別荘住民のご健闘を委員の皆様とともに祈念いたします。

用語解説

※17：健康寿命

日常的に介護を必要とせず自立した生活ができる期間、平均寿命から介護期間を引いた年数を指す。現在の日本の平均寿命と健康寿命の差は 10 年程度であり、社会保障の負担軽減の観点からも、町民全体の健康づくりの必要性が高まっている。